「宮崎県立美術館のこれからを語る会」発言概要

平成２８年２月１２日（金）
１０：３０～１１：３５
県　庁　本　館　講　堂

［協議テーマ］
社会の進展や県民の多様なニーズに対応していくために、宮崎県立美術館はこれからどんなことに取り組まなければならないのか。
～宮崎県立美術館の１０年後の姿を、みんなで描こう～

知　事

県立美術館が開館２０周年を迎えるにあたって、この会の開催を通じて、さらにより良くするためにいろいろな声を集めて議論したり、問題提起したりして、今後に結び付けていきたい。

宮崎国際音楽祭は、数年前に、県外の方々中心でごく限られた人だけが楽しむものになっていないかという声があり、もっと県民に開かれたものにしていくための見直しを行い、現在、その議論により、広がりを見せてきている。美術館についても、美術作品の収集や、スタッフのこと、県内の他美術館との連携など、様々な視点からさらに議論していきたい。先日、大分県立美術館がオープンしたが、他県の様々な刺激を受けながらいろいろな取組に生かすことができたらと考える。

これまで２０年間積み上げてきたものをさらにより良くするための議論をしていきたい。

協議の視点

(1)　県民にとって、県立美術館はどのような存在であるべきか。

○　今後も県民にとって、県立美術館は、県内美術の拠点であり、子どもの教育・学習の拠点であるべきである。

○　少子高齢社会に対応する館であってほしい。高齢者から「敷居が高い」という声を聞く。それは、入場料が負担になっているからではないか。例えば「シルバー料金の設定」や、「年金支給日は無料」などの行政サービスがあると利用しやすくなり、県民の文化水準を高めることにつながるのではないか。

○　現在、子どもを取り巻く環境は、インターネット、ゲーム、テレビなど液晶があふれている。本物にふれたり、見たり、感動することが少なくなっている。将来を背負う子どもたちに、本物にふれる機会を提供していくことは大人の責任である。

○　遠足で様々な施設には行くが、残念ながら、なかなか美術館に行く機会が少ない。美術館が身近な存在となっていない。気軽に入りづらい、収蔵作品の情報がないことも原因ではないかと思う。子どものころから美術館に行き、感動する体験が重要である。幅広い世代が楽しめる場であってほしい。

○　若い母親や高齢者等が、美術作品の奥深さを理解するための解説を充実させてもらうとありがたい。

○　若い世代や子どもたちに、瑛九の素晴らしい作品を見てもらいたい。

○　基本的なコンセプトはジェネラルであるべきである。様々な年代の方々に対応する館であることが大事であると思う。小さいうちからリピーターとして楽しめる館でありたい。

○　小さな子どもの子育て真っ最中であるが、小さい子と一緒に入れる雰囲気づくりが図られると良い。

(2)　県立美術館周辺の文化・社会教育施設や、公的機関（市町村や学校を含む）、企業、民間団体等と連携した事業展開の在り方

○　今年度、西米良村を舞台に「わがまちいきいきアートプロジェクト」を実施していただいた。分かりにくい印象もある芸術について、村民、県民が近づく良い機会となった。今後は、作家と地域住民との間で協力体制をどう構築するか、ゴール設定をどうするか、作成後にどう活用するか等を地域住民や行政と話し合って進めていくことが重要ではないか。
○　美術館スタッフ（学芸員）は、教育委員会事務局試験により採用された人であり、美術館勤務後に学校現場に戻るわけであるが、その方々の活用を有効に行うと、より充実した教育普及活動ができるのではないか。
○　ある県では、「美術館ボランティア」という制度があるらしい。過去に美術館に勤務した方々をネットワーク化して教育普及活動に生かしているらしいが、本県でも取り組むことができないか。
○　学校との連携は重要である。いかに美術好きな子どもを育てていくか。「楽しい鑑賞の心得」のような考察型の学習が必要ではないか。
○　隣の芸術劇場とのコラボを考えたい。アートマネジメントの視点も大事にしたい。
○　美術館単独だけではなく、音楽や映像とのコラボなどの取組も可能性があり、若者のニーズにも合うのではないか。
○　文化エリア一体としての活用も考えたい。
○　気軽に入館しやすい美術館にするためには、ハード面の改修も必要になってくるかもしれない。
○　わが子を美術館に誘うがなかなかのってこなかった。しかし、そんな絵心がない娘が、学校の行事でタビビに行き、「また行ってみたい」との言葉が出た。そんな言葉を言わしめる県立美術館の取組に感謝している。
○　ルーブル美術館では、学生が館内で座り込んでスケッチしたりしており、地域の拠点として成り立っていると感じる。人が足を運びやすい雰囲気づくりをしてもらいたい。
○　国内外、県内外に紹介できる美術館であるが、今後は、美術館だけの取組だけではなく、芸術劇場の音楽や映像、図書館との連携など、枠を超えた取組を期待したい。
○　高校生は県立美術館をあまり利用していない現状がある。高校生による作品展示を県立美術館内で開催するなどの仕掛けが必要である。

(3)　今後の作品収集や調査研究、県内及び他県美術館との交流展等の実施の在り方

○　宮崎県立美術館の特徴は、特に子どもたちを対象とした教育普及活動に力を入れていることであり、この良い点は今後も継続してほしい。
○　調査・研究活動と教育普及活動を対立的にとらえるべきでない。
○　本来の教育普及活動は、調査・研究活動を土台として展開するべきものである。
○　調査・研究活動に力を入れているある美術館では、「県民のニーズに応え過ぎてはならない。迎合してはならない。高い水準の研究を土台とした活動を行うべきである。」という考えをもっているが、矜持ある発言である。研究成果を県民に分かりやすく伝えることが、本来の教育普及の形である。
○　収集方針は非常に大事である。現在の宮崎県立美術館の収集方針である①「郷土出身の作家及び本県にゆかりのある作品」については、郷土作家の作品を収集することは地方美術館としては当然の役目である。②「我が国の美術の流れを展望するにふさわしい作家の作品」や、③「海外の優れた作品」については、何でもありとなってしまうので、収集方針をもっと具体的に分かりやすい文言にするべきではないか。

(4) その他

○　単にプロパーが増えても、美術館としての風土がなければ厳しい。現在の宮崎県立美術館の学芸体制（プロパー１名）は、全国の標準と比べて乖離している。今、その基盤を見直さなければ、１００周年の時、どのような美術館になっているか憂いている。そのためにも本日、このような議論の場が設けられたことを有り難く思っている。
○　県立美術館で実習を行った学生はもちろんのこと、学芸員有資格者が、学芸員として県立美術館で働けるよう公募をして門戸を開いてほしい。
○　館長や学芸員を公募制にしてはどうか。これを開館時にできなかったことが、全ての問題の根源ではないか。長期的な計画が立てられない。
○　美術館運営に携わる責任者は、４０～５０歳代までの方が適任ではないか。
○　教員の初任者研修の一部を美術館で行うシステムを構築してほしい。幼児教育に携わる方々も同様である。県内の生涯学習に携わる方々を年１～２回程度、美術館に無料招待してほしい。
○　現在の県立美術館の職員体制は希少価値があるし、それを生かす方法もある。
○　他の館では、プロパーとして採用された学芸員というのは、定年まで異動がないこともある。良い面もあるが良いことだけではないのではないか。
○　大学卒をプロパー職員として採用するよりは、教育現場から４０歳代の優秀な人材を１０年くらいの期間で美術館学芸員として採用してほしい。また、学芸員一人一人の仕事・役割を明確にするべきである。

知　事　宮崎のような限りあるリソース（予算や人材、マーケット）の中では、どういう県立美術館にしていくかという方針をもつことが大事である。収集方針や学芸員や学校現場との関係など、今ある方針をさらに磨き直す必要がある。今後さらに県民の御意見を伺いながら、教育委員会でビジョンをつくることになる。参加者の皆様の御協力に感謝申し上げる。今後もいろいろな場で御意見を頂戴したい。みんなの力でより良い美術館、より良い宮崎の風土をつくることができたら思う。